

唐通事の中国語について

喜多田 久仁彦

〈提要〉

江戸時代、長崎唐通事在从事贸易活动和管理唐人方面所需要的语言是南京官话、福州话以及漳州话。这三种语言是跟唐船启航地—中国南方—有密切关系的。其中，因为南京官话在中国使用的区域比福州话和漳州话更广，所以南京官话在抵日唐人和唐通事之间具有一种通用语言的性质。唐通事在融入日本社会的过程中，其唐话已经不是自然习得的而是需要学习掌握的。他们使用的教学法、教材以及发音曾影响到明治初期的日本汉语教学。

本文试图通过唐通事的工作内容，唐话教材，教学法来探讨唐通事怎样学唐话以及明治初期的日本汉语教学情况。

1. 「通事」という名称の来源について

小論で取り上げる「唐通事」は、江戸時代の長崎に設置されていた地役人を指すが、「通事」という職名は、日本でいつ頃から使用されたのかを確認しておく。

「通事」という職名は、「訳語」という通訳の職名とともに『日本書紀』にはすでにその表記が見られる。例えば、

推古天皇 卷二十二

十五年秋七月大禮小野臣妹子遣於大唐以鞍作福利為通事

(十五年秋七月大礼小野臣妹子大唐に遣わし、鞍作福利を通事とした。)

この「通事」の訓として「曰佐（おさ）」という読みが使用されていた。この「曰佐（おさ）」の起源については、遠山（2005）に詳しい¹⁾。

「通事」という職名は、律令の細則集である927年（延喜5年）の『延喜式』にも見え、「大通事」、「少通事」の職階まで挙げられている。下って、江戸時代のオランダ語の通訳を表記した「蘭通詞（辞）」とは異なる「唐通事」の「通事」という表記は、古代から使用されてきた職名であり、その語源は、同じく古代から使用されてきた「記録者」や「書記」の役職名である「録事」と同様に「事を通じさせる（通事）」という動作・行為が職名になったものであろう。「通事」を動詞として使用しているものとしては、『続日本紀』に見える。

聖武天皇 天平二年（730 年）

又諸蕃異域風俗不同若無訳語難以通事…〈略〉

また、諸蕃異域風俗が異なるので、もし訳語がいなければ事を通じさせることが難しい。

（「訳語」は通訳の意）

江戸時代の長崎の「ツウジ」には、唐話（中国語）とオランダ語という 2 種類があり、それぞれ「唐通事」と「蘭通詞」と表記された。この「通事」と「通詞」の区別について、杉本（1990）で次のように述べている²⁾。

オランダ語の通訳は〈オランダ通詞〉と呼んで、中国語の通詞〈唐通事〉と区別して、記述している。もっとも通詞と通事とは不分明な内容・表記のところもあって、私見ではおそらく、〈通事〉が根源であって、区別の必要から二次的に〈通詞〉ができたかとおもう。後々まで、文書などでも時としてオランダの通訳を〈通事〉と書くことがみうけられるのもそのためだろう。

先に述べたように「通事」が古代からすでに使用されていた記録があることから、「通事」が「通詞」よりも古くから使用されていたのは確かである。

一方、「通事」や「通詞」以外では、「通辞・通訳・訳家・訳師・訳官・訳士・訳司」などが使用されたが、『続日本紀』や『延喜式』等で使用されていた「訳語」は、江戸時代では使用されていないようである。

1604 年（慶長 9 年）に長崎奉行である小笠原一庵が馮六という長崎在住の中国人を「唐通事」に任命してより、1867 年（慶応 3 年）の唐通事の解散まで 260 年余に亘って、延べ人数 1,644 名（実数 826 名）対して用いた正式な職名であった。江戸時代の長崎の行政組織（地役人）に唐方として「唐通事」、蘭方として「蘭通詞」が設置され、そのように表記されていることから「唐通事」が江戸時代の正式な表記であったことは確かである。

2. 唐通事の目的と役割

江戸時代に長崎に唐通事が設置された目的とその役割は何だったのであろう。

唐通事には「本通事」と「内通事」の 2 種類があった。

本通事：唐大通事－唐小通事－稽古通事という階級があり、先祖代々世襲制の役職。

内通事：唐人の宿泊した船宿に勤めながら、荷役や来航唐人の世話をし口銭を稼いでいた者で、地役人として採用された者。

（小論で言う「通事」は、特に注釈を加えない限り「本通事」を指す。）

長崎奉行所の組織は、時代によって行政の内容が複雑多岐になり、それに対応するために細分化され複雑になっていく。そこで、長崎の行政組織が最終的に整ったと言われる元禄期頃、1702年～1708年（元禄15年～宝永5年）の長崎諸役人略図³⁾を見てみると、

「長崎町年寄」の下に「番方」・「町方」・「唐方」・「蘭方」がある。

「唐方」には「唐通事」が置かれ、

「唐通事」には「唐大通事（4）」－「唐小通事（4）」－「稽古通事（11）」がある。

（数字は人数）

この唐通事が「本通事」であり、下位の「稽古通事」から「唐小通事」を経て「唐大通事」へと昇進して行く。この「稽古通事」には「唐大通事」と「唐小通事」の子弟しかその職に就けなかった。「唐小通事」の「(4)」という人数は、後で述べるように唐通事の定員（大通事と小通事併せて9）から見れば1名少ない。この9名の定員は1661年（寛文元年）から始まったが、何かの事情で1702年～1708年（元禄15年～宝永5年）は欠員であったのかもしれない。

一方の「内通事」は、かなり下位に記されていることから下級役人であることが分かる。実際には、「稽古通事」よりも下位に置かれていた。この「内通事」は、1666年（寛文6年）に来航唐船の宿泊制度（宿町付町制）⁴⁾を改めた際に、ある程度中国語による会話ができ、個人的に唐人の身の回りの世話や荷役の手伝いをしていた167名を採用し、地役人化したのが始まりである。この「内通事」には相当数の日本人がいたようで、唐話界の泰斗と称される「岡島冠山」は、この「内通事」出身である。

また、この「長崎諸役人略図」や1681年（延宝9年）頃の長崎の行政組織図⁵⁾の中に「唐通事」の下に「呂宋通事」、「シャム通事」、「東京通事」などが置かれていることから、当時の唐船の出港地として、現在のベトナム、マレーシア、タイなどの東南アジア諸地域があったことも分かる。

江戸時代に長崎の行政組織の中に設置された唐通事の役割は、時代によって変化している。設置当初は、対外貿易が自由に行えた時代で、来航唐人と地縁や血縁で結ばれた長崎在中の中核的な唐人を役人化することで、幕府が長崎における唐船貿易を掌握すると同時に長崎における唐人社会をも掌握しようとしたためであった。その後、1688年（元禄元年）の唐人屋敷開設を経て、唐船貿易の統制と宗教の検視等の行政的業務が中心となり、さらに、正徳新例⁶⁾（1715年）以降は、唐通事に唐人との間で通商の契約を結ばせ、唐通事の署名捺印を施した「信牌（長崎通商照票）」を持参した船に限って日本での貿易を許可したという、言わば唐船貿易統制の実権を握っていた「通商官」でもあった。

唐船貿易の統制と検視という点においては、幕府の対外政策に対する違反を規制するため、来航唐船に関する取締一切を執行し処理をした。実際にどのようなことを行ったのかその一部を唐通事の教本である『譯家必備』の「唐船入港」に見てみる。

唐船が港に入り、唐通事が役人と共に船に乗り込み、無事到着や時候の挨拶などを交わした後、通事と来航唐人との会話である。(実際はこのように会話体ではないが、理解を助けるため話者毎に書き改めた)

○船上での貿易許可書など確認

頭目上了船你見見頭目頭目坐的所在鋪下席子麼

曉得鋪好在那裡

牌照貨冊一併拿出來…貨冊寫好了嗎物件的斤量寫得明白了嗎

老爹看看

這個我們不敢看新例以來這貨冊最要緊不許人家開看你交把我我轉交頭目頭目拿到王府在王府裡叫我們通事來翻好了才把商人抄去…

奉行所の役人が船に上がって来たら会うように。役人が座る場所には敷物があるか。

はい、あそこに敷いてあります。

信牌と積荷帳を出しなさい…積荷帳はちゃんと書いたか、品物の量ははっきり書いたか。通事様、ご覧ください。

これは我々が見るわけにはいかない。正徳新例以降この積荷帳が最も大切で、他の者が開いて見ることでできないのだ。お前が私に渡し、私が上役に手渡し、そこから奉行所に届け、奉行所で我々通事が翻訳した後にはじめて商人がそれを写して…

○船上での禁令の伝達

你們躡銅板念告示告示掛在大桅底下財副你去念起來把大家聽聽也要仔細不要糊塗你們眾人聽告示留心聽聽不要胡亂看東看西說說笑笑頭目看見在這裡沒有規矩不好意思

晚生曉得了

當下財副高聲念起來說道諭唐山併各州府船主及客目稍等知悉…

踏み絵をしなさい。告知を読みなさい。告知板は帆柱に掛けてある。脇船頭が皆に読み聞かなさい。ちゃんと読み、読み方がいい加減ではない。他の者も聞く時は心して聞き、よそ見や談笑してはならない。検使にけじめがないと見られてしまうと格好がつかない。

承知しました。

その時、脇船頭が大きな声で、唐山ならびに各地の船主及び船客に諭して知らしめると読みはじめ、…

踏み絵をさせ、上陸に当たって帆柱に掛けた告知板に書いた禁止事項を読み聞かせる場面である。このように、通事は唐船の入港と同時に検使と一緒に唐船に乗り込み、船員の上陸許可や積荷確認等に関する通訳や実務を行ったのである。李献璋（1990）に入港時の手順とさらに唐通事

の詳細な職務内容が挙げられているので引用する⁷⁾。

彼らは唐船が入港すると、乗りこんで禁令を伝達した上、違法の有無を検査して奉行所に報告し、同時に来航船主の要望をも取り次いで、奉行所の指示を執行する。具体的は検視・荷役に立会い。違反者の召還・連行、審問の通訳、文書の和解、上陸・出航の許可や宿などの滞在生活の管理、商品売買の介在、及び奉行の諮問に応じて慣例・意見の具申、渡来人物の接待や案内、軽犯罪者や金品の預かりまでした。

延宝6年9月に一時唐通事に帯刀を許したのもその職務の権威と関係があると思われる。来航唐船の事ばかりでなく、唐通事は唐船貿易を統制する以上、貿易に依存する船宿、及び来航明商の参加する祭祀行事をとおして住宅唐人を、また唐船の菩薩揚げ、祈祭・寄進や渡来唐僧のことをとおして唐寺をも支配している。通事をはじめ唐船・唐人関係諸役職の任用と推薦・考査を掌握していたのは言うまでもない。このように通事は、中国商人が用事万端を接触する窓口であり、彼らの利害を左右する直接的な役で、…

先に挙げた『譯家必備』には、唐船が入港から出港するまでの事柄や長崎滞在中の生活、例えば、「唐船進港、修船、開船、領牌、口外守風、本船起貨、請庫、講價、對帳、拜馬祖、上墳、身故、護送日本難人、牽送飄到難船」等、で必要とされる中国語会話を学習するように編まれたもので、その内容から唐通事の業務内容を詳細に知ることができものである。唐船の入港から出帆までの順、特に、積み荷の荷揚げ、入札など商取引の手順は、山脇禎二郎（1995）に詳しいので参照されたい⁸⁾。

通商関係以外では、江戸時代、幕府は、長崎における唐人の犯罪については、属人主義を採っており、原則として刑罰を加えず、唐人の喧嘩等などの処理を唐通事に任せていた。

このように唐通事は、来航唐船の検視、唐人滞在中の貿易業務、生活管理等々、言わば、来航唐人に関わるすべて幅広く関与していた。

3. 唐通事の中国語の種類

唐通事は、その業務を果たすために、どのような中国語を習得し、また使用したのであろうか。

唐通事が勤めた通訳としての重大な役目は、長崎に来航した唐船の船主や荷主との通商上の通訳や長崎滞在中の唐人の管理上必要な通訳であった。来航唐人などが使っていた言葉について、中嶋（2015）で次のように述べている⁹⁾。

中国人の海商にとっては、東・南シナ海の海域はわが庭も同然であって、平戸、長崎、呂宋（ルソン）、東京（トンキン）などでは「南京官話」が共通語となっていた。この言語は、江浙地区はもちろん福建沿岸の諸都市（福州・漳州・厦門等）にも通用していた。閩語地区で

は、官話を使用してはいるが、その発音は自分の閩語のなまりを相当程度混入させながら話していた。このような地方的な変種までもがひっくるめてその当時「官話」と称されていたのである。南京官話は、明帝国の首都が南京から北京に遷都（1421年）して後も、約220年近く発展し継続する中で明代官話となり、国家語の地位を得ていた。「官話」とは、官場（官界）の言語、即ち公用語という意味であり、政府官員が中国全土で施政を行うのに用いた言語である。

山本紀綱（1983）でも同様のことを述べている¹⁰⁾。

18世紀末寛政期の長崎唐通事と唐商たちは、相互の共通語として、語法語彙はできるだけ官話を主用したものの、その発音はアモイ方言音、福州方言音、それに蘇州方言音のなまりが混用されるブローケンな発音が通用していたようで…

当時、来航した船は、「口船・中奥船・奥船」¹¹⁾と分類されていたが、中国南部が殆どであり、中国以外では、現在のベトナム、タイ、マレー半島、ジャワなどもあったが、その船主や乗組員は、中国南部出身者であったことから、やはり中国の南方方言を操れることが要求された。その方言には「南京方言・福州方言・漳州方言」の3種類があり、言葉という意味の「～口」という文字を加えて、それぞれ「南京口・福州口・漳州口」と呼ばれた。一人の通事がこの3種類の方言をすべて習得していたのではなく、それぞれの家系に専門の言葉（口）があり、それを言わば「家職」として世襲していったのである。代々継承されてきた言葉と、時として実際の業務で必要とされる言葉については、『唐通事心得』に次のような部分がある。

有一個漳州通事年記不過二十一二歲…這幾天到我家裏來學官話他的主意自己雖然會講漳州話有公幹出去見了外江人說話不大通的時節，縱或有膽量敢做敢為會得料理事情也是礙手礙腳未免做得不停當了所以他學官話…

21, 22才位の漳州口の通事がここ数日私の所に官話を習いにきております。この通事の考えでは、自身は漳州語はできるのですが、公務で外江の人（長江下流域の人）と会ってあまり話が通じない時は、度胸でもってやれば、なんとか事を処理できるのですが、どうしても手間取ってしまい、スムーズにいかないと言わざるを得ない。そこで官話をならうことにした…

「家職」としての言葉は「漳州口」ではあるが、それだけでは不十分で「官話」を習得する必要があった。それはすなわち「南京官話（南京口）」が来航唐人との接触において「福州口・漳州口」よりも共通語としての性格を有していたことを意味すると考えてよいのではないか。

通事には定員があり、特に次に挙げる1661年（寛文元年）以降は、「大通事5、小通事4」が

定着し、唐通事解散まで継続された。この九家を「訳司九家」と呼ぶ。

1661 年（寛文元年）唐通事の構成

大通事	額川藤左衛門	漳州口
	彭城仁左衛門	福州口
	柳屋次左右衛門	南京口
	陽惣右衛門	南京口
小通事	林甚吉	福州口
	林道栄	福州口
	東海徳左右衛門	南京口
	額川藤右衛門	漳州口
	西村七兵衛	漳州口

大通事 4、小通事 5 が定員であり、漳州口 3、福州口 3、南京口 3 と均衡がとれており、この比率は、時代によって多少の増減が見られるが、唐通事の解散までこの割合が保たれるように調整されたようである。

4. 唐通事の中国語習得

唐通事は、如何にして祖先から伝えられてきた専門の言葉（口）を習得したのか。江戸時代初め、唐通事に任命された馮六をはじめとする鎖国以前から長崎や九州地方在住の唐人は、1639 年（寛永 16 年）鎖国令完成に伴う帰国希望者の出国と新規或いは再来日の禁止によって土着化せざるを得なくなった。日本人配偶者との間に生まれた子孫たちは、世襲すべき専門の言葉（南京口など）を「父子口伝」が可能であった二代目や三代目は、辛うじて日常生活で中国語を使用していたとしても、その後は、日本社会への同化が一段と進み、業務で使用する言葉は、すでに母語ではなく学習の対象となっていたと想像するに難くない。

当時の書物や唐通事が編輯し使用した教科書などにその状況が見て取れる。例えば、唐通事の使用した教本『小孩兒』の次の部分から、日常生活で使用している言葉は、日本語であって唐話でないことが明白となる。

在我的背後講日本話の時節鬼話連天只管多嘴一日到晚總是不住口臉皮鐵也似厚若說起唐話來不但是臉皮薄像個耳聾口啞一般閉住口在那里…（下線は筆者が付けた、以下同じ）

先生が見ていないところで日本語を話す時は、嘘やでたらめを重ね、余計なことばかり口にして、一日中しゃべりっぱなしである、面の皮が鉄のように厚い、なのに唐話を話し出すと、面の皮が薄く、ずっと口をとじたままである

唐通事は、学習の対象となった唐話をどのようにして習得したのだろうか。同じ『小孩兒』から唐話を勉強するための「塾（学校）」に通っていたことが分かる。

我和你説你們大大小小到我這裡來讀書先不先有了三件不是的事情等我分説一番把你們知道你們須要牢牢地記在肚裏不要忘記原來人家幼年間到學堂讀書不是學人不正經要是學好的意思…
我這裡就是學堂因該正經些不該亂七八糟只管放肆…

先生はお前達に話しておきたいことがある。お前達は大きな子も小さい子も私のところに習いにきているが、まずもってしてはならないことが三つある。それを分かりやすく説明するのでしっかりとおぼえておきなさい。そもそも幼い頃から学校に通って勉強するのは、不真面目ではなくしっかりと勉強しないとイケないのだ。…私のところは学校なので当然真面目にするべきで、無茶をしたり無作法であってはならない…

では、学習を開始する年齢はどれくらいだったのか。雨森芳洲の『橘窓茶話』では次のような文があるのである程度年齢は判明する¹²⁾。

通詞家咸曰唐音難習之當七八歲為始殊不知七八歲則晚矣…

通事家は皆口を揃えて、唐音は習うのが難しく、7、8才から始めねばならない。7、8才でも遅いかもしれない…

学びの対象となった唐話は、7、8才から家庭教育として伝授されたり、塾（学校）に通って身につけねばならなかったのである。

次のどのような教材使って、どのような手順で教育がなされたのかをしてみる。

武藤長平（1926）が教材と手順について詳述しているので引用する¹³⁾。

長崎に於ける唐通事の支那語稽古の順序を略説するが、唐通事が最初に発音を学ぶ為に『三字経』『大学』『論語』『孟子』『詩経』等を唐音で読み、次に語学の初歩即ち恭喜、多謝、請坐などの短き二字を習ひ、好得緊、不曉得、吃茶去などの三字話を諳んじて更に四字以上の長短話を学ぶ、その教科書が『譯詞長短話』五冊である、それから『譯家必備』四冊『養兒子』一冊『三折肱』一冊『醫家摘要』一冊『二才子』二冊『瓊浦佳話』四冊など唐通事編輯にかゝる写本を卒業すると此に唐本『今古奇觀』『三国志』『水滸伝』『西廂記』など師に就きて学び進んで『福恵全書』『資治新書』『紅樓夢』『金瓶梅』などを自習し難解な處を師に質すといふのが普通の順序である。

発音 → 日常会話（常套句）→ 中級読物（通事業務に必要な内容も含む）→ 中国の読

物（文学作品など）

という順は、使用する教材はともかくとして、手順・方法は、現在と大差がない。

「唐通事編輯にかゝる写本」とは、つまり唐通事自らが編輯した教本である。長崎に現存する唐通事編輯の教材は20種以上あり、そのなかでも『譯詞長短話』と『譯家必備』は、その書名からも明らかなように「訳詞」・「譯家」、つまり唐通事のために編まれた教本であり、特にこの2種類が重宝がられ、これを修了することが肝心であったと言われている¹⁴⁾。

このように7, 8才から唐話の学習を始め、一定の学力を習得すると、15, 6才で通事の最下位「稽古通事」となり実務経験を積み、上位へと昇進していくのであった。

5. 明治時代初期の唐通事の動向

1868年（慶応4年）明治維新政府が成立し、幕藩体制が崩壊するとともに長崎の幕府支配も終焉を迎え、その前年の1867年（慶応3年）長崎の地役人であった唐通事も解散するに至った。

唐通事の中には新政府に召し抱えられ、裁判所の翻訳方、政府（外務省）の訳官になる者がいたが、1871年（明治4年）外務省内に官立の語学学校として設置された「漢語学所」では、教師は、唐通事出身者から任用され、また生徒の多くも唐通事の子弟であった。例えば、1870年（明治3年）に任命された7名の漢語教師は、鄭永寧、葉（潁川）重寛、葉雅文、蔡祐良、周道隆、張（清河）武雅、劉（彭城）中平〔（ ）内は日本姓〕などその名からも明かなようにすべて唐通事出身者である。

「漢語学所」が外務省内に設置された理由は、日本と清国との間に国交を開くことになり、その通訳や実務を担当する中国語要員の養成が必要となったためである。この時から当時の中国語は、「唐話」から「漢語」という名称に変更された。

この「漢語学所」は、1873年（明治6年）「東京外国語学校漢語科」となるが、そこでも教師と多くの生徒は、唐通事出身者とその子弟であった。

この「漢語学所」と「東京外国語学校漢語科」で唐通事出身者である教師が教えた漢語（中国語）は、当然、南方方言の「南京官話」であった。そして、教材も江戸時代に唐通事を使用したものを使った。この状況については、六角恒廣（1988）にある中田敬義の懷旧談を引用する¹⁵⁾。

一番はじめにアイウエオ、カキクケコを習はされた。今考へてみると変な話だが、そこで音を直すといふのだつた。『三字経』を支那音で習つた。それから『漢語跬歩』といふ三冊ほどの黄色い表紙の本を習つたが、これは単語だけ並べたものだつた。それから進んでは、長崎唐通事の使つてゐた『二才子』とか『鬧裏鬧』とか、『訳家必備』とかいふような写本類を使つた。いまひとつ、なんとかいふ名であつたか忘れたが、船から長崎に上陸したときのことを書いたものであつた。これは進んだ方であつた。

ここ（東京外国語学校漢語科）に入ってから以前（漢語学所）とはちがひ、「今古奇観」をすこしづつ支那語で教はり、また作文は日本の官庁の布達とか告示とかを支那の吏牘文に訳したり、また上海の申報などの記事の散文を日本文に翻訳するといふようなことをした。これはみんな頼川氏の担当だったから、長崎風の発音で教へられた。

（ ）は筆者が付加した。

「漢語学所」、「東京外国語学校漢語科」いずれも南京官話を唐通事時代の方法で教育されたことが分かる。

1873年（明治6年）4月、日清修好条規が批准されて、日清間に正式な国交が開かれた。この批准以降、北京政府との外交事務上の要請から、また、北京官話が中国の共通語の性格を持つことから、日本で北京官話の教育が必要となり、東京外国語学校では、1876年（明治9年）9月から北京官話の教育が実施されるようになった。北京官話に関する教材がない中で、教材として使用されたのは、1867年にロンドンで出版された北京駐在公使を務めたトーマスウェード（Thomas Francis Wade）の『語言自邇集』である。

これを境に教育の現場では唐通事時代の南京官話から北京官話に切り替えられたのである。

先に挙げた中田敬義は、1876年（明治9年）外務省留学生として在北京日本公使館に派遣され、北京官話を学習する機会を与えられている。

幕末期に唐船来航の激減を踏まえて、英語学習に転じた唐通事がいたことやアヘン戦争以降、欧米の船舶は広州、厦門、上海等の港を拠点とし、日本に来航する船には通訳としてその地の中国人を乗せていたことから、欧米諸国の船との交渉に唐通事が当たったこと等々、幕末期の唐通事たちの動向は様々であったことを付け加えておきたい。

6. ま と め

江戸時代、地役人として長崎における唐船貿易・唐人の管理監督業務を遂行した唐通事が必要とした唐話は、来航船の起帆地であった中国南方の方言、南京官話・福州語・漳州語であった。

唐通事が日本に同化することにより、唐話は、業務を遂行するために学習し習得しなければならない言葉となった。

この学習過程で使用された教材、方法が明治時代初期に外務省内に設置された「漢語学所」や「東京外国語学校漢語科」で教師に任用された唐通事出身者によって継続して利用された。明治維新から1876年（明治9年）の北京語教育への転換までの9年間ではあるが、この時の中国語教育は、「唐通事出身者によって、唐通事の教材で、唐通事の発音で」行われたのである。

注 釈

- 1) 遠山美都男『古代王権と大化改新』P 303 に次のような説明がある。
古代において日佐（訳語）をカバネとする氏族が見られる。日佐は訳語・通事の訓であって、日佐という字は「日ヲ佐ケル」という訳語・通事の職掌からの着想なのであろう。日佐は集団を統率した首長を意味するオサに通じる。それは統率する集団を代表として外部の集団との交渉を行った首長の権能と、異民族の言語を解し、話すことができる訳語・通事的能力とが合わせてとらえられた結果である。
- 2) 杉本つとむ『長崎通詞ものがたり』P 9
- 3) 長崎県史編集委員会『長崎県史対外交渉編』吉川弘文堂 1986. 「行政機構」折込図表参照
- 4) 1666 年（寛文 6 年）から実施した来航唐人の宿泊と貿易業務の担当制度。長崎のすべての町が順番で、町単位で来航唐人を宿泊させ、貿易業務を担当した。
- 5) 長崎県史編集委員会『長崎県史対外交渉編』吉川弘文堂 1986. 「行政機構」折込図表参照
- 6) 日本の主要輸出品である銅の不足、輸入品価格の高騰、抜け荷防止のために新井白石の主張で 1715 年（正徳 5 年）から実施した来航唐船を制限する新令。1 年間の入港定数を 30 艘に限定し、唐通事の名で発行する「信牌（長崎通商照票）」を給付した商人に限り入港を認めた。
- 7) 李猷璋『長崎唐人の研究』佐世保 親和銀行 1991 年. P 317
- 8) 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』東京 吉川弘文館 1995 年. P 297～309
- 9) 中嶋幹起『唐通事が学んだ言語とその教科書』『中国語教育』13 号 中国語教育学会 P 4
- 10) 山本紀綱『長崎唐人屋敷』謙光社 1983. P 298
- 11) 大庭脩『江戸時代の日中秘話』東京 東方書店 1986. P 37 次のように分類されている。
口船：江蘇・浙江両省から来る船。
中奥船：福建省、広東省出帆の船。
奥船：ベトナム、マレー半島、ジャワ、タイなど東南アジア地域からくる船。
- 12) 『芳州文集 雨森芳州全書』2 大阪 1980. 関西大学東西学術研究所資料集刊
- 13) 武藤長平『西南文運史論』東京 1926. P 51
- 14) 中嶋幹起『唐通事が学んだ言語とその教科書』『中国語教育』13 号 中国語教育学会 P 6
- 15) 六角恒廣『中国語教育史の研究』東京 1988. P 33, P 51

主な参考文献

- 杉本つとむ「長崎通詞ものがたり」創拓社 1990.
 遠山美都男「古代王権と大化改新」雄山閣 2005.
 李猷璋「長崎唐人の研究」長崎 株式会社親和銀行 1991.
 山脇悌二郎「長崎の唐人貿易」吉川弘文館 1994.
 山本紀綱「長崎唐人屋敷」謙光社 1983.
 大庭 脩「江戸時代の日中秘史」東方書店 1986.
 六角恒廣「中国語教育史の研究」東方書店 1988.
 六角恒廣「漢語師家伝」東方書店 1999.
 林 陸朗「長崎唐通事」長崎 長崎文献社 2010.
 木村直樹「〈通訳〉たちの幕末維新」吉川弘文堂 2012.
 武藤長平「西南文運史論」岡書院 1926.
 石崎又蔵「近世日本のおける支那俗文学史」清水弘文堂書房 1967.
 長崎県史編集委員会「長崎県史 対外交渉編」吉川弘文堂 1986.
 長崎市役所「長崎と海外文化」長崎 1926.

- 関西大学東西学術研究所「芳州文集」『雨森芳州全書』2 大阪 1980.
- 古典研究会編輯「譯家必備」唐話辞書類集第20巻所収 汲古書院 1976.
- 中嶋幹起「唐通事が言語とその教科書」『中国語教育』13号 中国語教育学会 2015
- 孫 文「唐船風説：文献と歴史——《華夷變態》初探」北京 商務印書館 2011.